

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

第四章 白髪頭の少年

この一家の仕打ちにわたしが腹をたてたとしても、その場限りのもので、すぐにそのことは忘れてしまった。

しかし、翌日たまたまクルンバー館の前を通りかかることがあって、例の札が目に残り、また苦々しい気持ちになった。その前で足を止め、將軍の一家はいつたいどういふつもりだろうと考えていると、ふと、かわいらしい少女が、門の鉄格子の隙間からこちらを覗いているのに気がついた。しきりに白い手で手招きしている。近づくと、先日馬車にいた少女だった。

「ウエストさん」と早口でささやき、落ちつきなく周りを見回した。「きのうは、あなたと御家族の方に本当に申し訳ないことをしました。兄が並木道のところですから見ていたんです。でも、どうすることもできなくて……。ずいぶんお気にさわったでしょうけれど、わたしも兄も、あんなもの」そう言ってさっきの札を指差した。「本当は嫌でたまらないんです」

わたしは笑ってはぐらかそうとした。「お嬢さん、イギリスは自由な国ですから、敷地を立ち入り禁止にしたかったら、そうしてはいけない理由はないんですよ」

「ほんとにひどすぎるわ」そう言うと、我慢ならないというように足を踏み鳴らした。「妹さんまであんな侮辱を受けたと思うと、もうわたし、恥ずかしくて消えてしまいたいくらいです」

「どっかお気になさらないでください。お父様も何かわけがおりなのかもしれないですねよ」わたしは、見るに見かねてそう言った。

「ああ、それがわからないんです！」その声には深い悲しみがこもっていた。「理由が何だったとしても、それから逃げないで、正面から立ち向かうべきだと思いますわ。でも、本当のところは父しか知らないのです、わたしたちにはとやかく言えないのです。あら、誰かしら？」令嬢はおびえた様子で並木道のほうを窺った。「ああ、兄だわ。モーダント、モーダント」と、近づいてくる若い男に呼びかけた。「ウエストさんにきの

つのごとお詫びしていたの。兄さんの分もね」

「ちよつとよかつた。ぼくからもお詫びを申しあげます。お父様、妹さんにもお詫びできればよかつたのですが。ゲブリエル、おまえは家に入ってなさい。もうすぐお昼の時間だから。いえ、ウエストさん、あなたはいてください。ちよつとお話したいことがあるんです」

ヘザストーン嬢はにっこり笑ってわたしに手を振り、軽やかに並木道を戻っていった。一方、兄は門の門をあけて外に出ると、また外から錠をかけた。

「もし差し支えなかつたら、そこらへんをぶらつきませんか。葉巻いかがですか？」と言つてポケットから二本取り出し、一本をわたしに差し出した。「なかなかうまいですよ。インドにいたとき、タバコに詳しくなりましたね。でも、ほんとにご迷惑じゃなかつたですか？」

「とんでもない、ご一緒できてうれしく思っていますよ」

「実を言つと、外に出たのは、これが初めてなんです」

「妹さんも？」

「ええ、妹もです。きょうは父の目を盗んで出てきたので、これがわかつたら、ただじゃすまないでしょうね。人と交わるなど釘をさされているんで。はたからはとんだ気まぐれと映るでしょう？ でも父にはそつするだけの理由があるみたいなのです。まあ、今度のことはちよつと行き過ぎですが」

「それじゃ、ずいぶん寂しいでしょうね。時々抜け出して、一緒に一服しませんか？ ほら、向こうに見えるのが、わたしの家です」

「ありがと。そつ言つてくださるとてもうれしいです」青年はそつ言つて目を輝かせた。「実際、飛び出たくてつづつずつしていたところですよ。話し相手といたら、イスレールくらいしかいないんですから。ああ、御者で庭師をしている男です」

「この青年は自分の話ばかりで、妹のことはあまり気遣っていないように思えた。」「妹さんは、なおさら寂しい思いをされているんじゃないですか」

「ええ、もちろんそつですが、男のほつが辛いですよ。この若さで閉じ込められているのはね。わたしを見てください。三月で二十三になるのに、大学はおろか、学校さえろくに行つたことがないんですから。そこらへんの田舎者と変わらないくらい無学なんですよ。不思議に思われるかもしれませんが、本当です。ひどい話でしょ？」

そつ言いながら立ち止まり、わたしのほつに向き直ると、わたしをはばむように両手の平を突き出した。

わたしは、正面から日差しを受けたその顔を眺めた。確かにそんなかこの中の鳥のような生活はこの青年には似合いそうもない。ムリリヨかヴェラスケスの絵から抜け出てきたような、浅黒くひきしまった彫りの深い顔立ち。きつと結んだ口と太い肩。すらりとした筋肉質の体はしなやかで、エネルギーに満ち溢れている。

「学校に行かなくても、本や経験から学べますよ。どつちかが足りなくても、もう一

方で補うことができますしね。あなただってずっとぶらぶらしていたわけじゃないでしょっ。」

「ぶらぶらですって！とんでもない！これを見てくださいよー！」そう言って、青年は帽子を脱いだ。頭髮はほとんど真っ白で、ところどころ白い縞模様になっている。「これでも、ぼくがぶらぶらしていたなんて思いますか？」青年は苦笑いした。

「何かショックを受けることがありませんか？」青年は苦笑いした。「わたしは、ひどくどぎまぎして言った。」それとも子供のころ、大病をされたとか。さもなければ、長い間心配ごとがあったとか。知人でも何人かあなたのように若白髪の人がいいますよ。」

「お気の毒に！心から同情します。」

「これから、時々抜け出してつちに遊びにいらしてください。妹さんも一緒にどうぞ。父と妹が喜ぶと思いますし、一、二時間でも気が紛れるでしょうっ。」

「一緒に抜け出すのは難しいと思いますが、機会があったらそうさせてもらいます。父は時々午後には昼寝するので、ひょっとするとうまくいくかもしれません。」

気がつくとき、わたしたちはブランクサムへ通じる岐路のところまで来ていた。青年はそこで立ち止まって言った。

「もう帰らなきゃなりません。いないのがばれてしまいますから。ウエストさん、本当にいろいろありがとうございます。ゲイプリエルもご招待の話を聞いたら、どんなに喜ぶかわかりません。父があんなに失礼なことをしたのに、ご親切本当にありがとうございます。」

握手を交わしたあと、青年はいったん来た道を戻りかけたが、すぐに追いかけてきてわたしを呼び止めた。

「さつきから気になっていたのですが、あなたはぼくたち一家のことをおかしな連中だと思っていらつしやるに違いありません。たぶんきょういらつしやったのも、精神病院を見るようなつもりだったかもしれない。でも、肝心の点をぼくが話さないからといって、悪く思わないでください。実は、他には口外しないと父と約束したのですよ。それに、たとえぼくの知ることをすべてお話ししたとしても、すべて理解していただけるとは思いませんし。でも、これだけはわかっていただきたいのですが、父は、完全に正気です。世間から孤立した生活をしたがっているのは、それなりのわけがあるのです。決して恥ずかしいものではなく、自衛本能でそうしているのです。」

「誰かに襲われる可能性があるというのですか？」わたしは思わず声を大きくした。「そうです。絶えずその危険にさらされているのです。」

「では、警察に助けを求めればいいじゃないですか。その男の名前さえ言えば、すぐに捕まえてくれますよ。」

「それがね、ウエストさん、父の直面している危険は、人間の力ではどうすることもできないんですよ。しかも非常に差し迫ったものなのです。」

「まさか幽霊のしわざだって言うんじゃないでしょうねっ。」

「そついつわけでもないんですが」とちよつと口「まったあと、また続けた。」やあ、ちよつと余分にしゃべりすぎてしまったようです。でも、あなたなら他言なさらないですよね。それじゃ、さようなら!」

青年はくるりときびすを返すと、あつという間に曲がり角の向こうに消えていった。間近に差し迫った危険があるが、人間の力ではどうしようもなく、かといって幽霊でもない。これじゃ、まるつきり謎じゃないか!

今までクルンバー館の住人を単に変人だと思っていたのだが、モーダントの話からすると、その行動には暗く不吉な意味が隠されているようだ。考えれば考えるほど、謎は深まる一方だったが、同時にますますわたしの頭から離れなくなった。

世間から隔離されたクルンバー館、そしてその住人にふりかかろうとする恐ろしい災難、

そついつものがわたしの想像力を刺激しないわけがなかった。その晩、遅くまで炉辺にすわりこんで、モーダントから聞いたことを一つ一つ思い返し、謎を解く手がかりになりそうな出来事にあれこれ思いをめぐらせたのだった。